

## 研 究 成 果 報 告 書

(ふりがな) さとうだいすけ

氏 名 佐藤 大輔

所 属 上越教育大学附属中学校・教諭

専攻名 学校教育研究科 教科領域教育専攻 言語系コース（英語）平成26年度修了

日本人中学生の即興的に英語を話す力（[やり取り]）の伸長に向けたICTの活用  
—話合いの可視化により発話量と英語スピーキング動機付けの向上を図る—

## 1. はじめに

中学校学習指導要領（平成29年度告示）解説外国語編において、「話すこと[やりとり]」の目標として、「ア 関心のある事柄について、簡単な語句や文を用いて即興で伝え合うことができるようにする」と設定されている。日常的な会話場面において、話し手と聞き手が即座にやり取りすることが多く、円滑なコミュニケーションを行うためには英文を組み立てる時間を多くとれないため、即興的にやり取りすることが必要である。日々の授業において、生徒の即興的に英語でやり取りする力の育成を目指し、様々な活動を継続的に実践している。例えば、帯活動で身近な話題（家族、趣味、好きなもの、週末の予定など）についてペアでやり取りする活動を位置付けている。1分など時間制限を設定し、生徒はその時間内でペアの相手と会話を継続することを一つの目標として取り組んでいる。その他にも、身近な話題についてグループでのディスカッションも位置付けている。生徒が活発に仲間同士でやり取りする様子が全体的に見られる一方で、「実際にはどのような内容のやり取りをしているのか」「英語でやり取りを続けているのか」「一部の意欲的な生徒だけでやり取りが進められていないか」など言語活動における生徒の様子を詳しく見取ることができないという課題がある。教師一人ですべてのペアやグループにおけるやり取りの状況を把握し、それぞれ適切なフィードバックを与えるには限界がある。そこで、ICTを活用することにより、生徒同士のやり取りを視覚化できると考えた。また、実際のやり取りの音声やグループにおける生徒同士の発話量分析データを振り返りで活用することにより、生徒が英語を話そうとする意欲を高め、やり取りの中で更に発話量を増やすことができるのではないかと考え、本研究を実践した。

## 2. 実践の概要

### (1) ICTの活用

生徒によるやり取りの発話量を視覚化し、分析するためのツールとして、Hylable Discussionという卵型装置（図1）を使用した。Hylable Discussionとは、対面の話合いを卵型レコーダーで録音し、自動的に見える化するクラウドサービスである。これを用いることで、会話のやり取りや総発話量などを可視化し、今まで実施することが難しかったやり取りのプロセスの振り返りや評価ができるようになる。それにより、生徒の話す意欲が向上するとともに、どのようにやり取りを増やすかを考



図1 Hylable Discussion

えるきっかけになり、英語を即興的に話す力が伸びることを期待し、本実践で使用し

た。

## (2) 授業における生徒の様子

本実践の対象は、中学校2年生計37名であった。4人グループになり、Hylable Discussionを中央に配置し、5分間ディスカッションを行った。ディスカッションのトピックは以下の通りである(図2)。

実施日	トピック
1回目 11月7日	Which do you like better, summer or winter?
2回目 11月14日	What club activity do you want to make for our school?
3回目 11月28日	Which do you like better, bento or school lunch?



図2 ディスカッションの実施日とトピック

なお、3回とも同じグループのメンバーでディスカッションを行った。

1回目は“Which do you like better, summer or winter?”について、既習表現を駆使しながら自分の考えを伝え合った。生徒のやり取りの発話内容(一部抜粋)と発話量(図3)は以下の通りである。

B3: Which do you like better, summer or winter?

C3: I like summer.

B3: Why?

C3: Because I like baseball. In winter, I can't play baseball outside.

B3: I like winter. I like ski(skiing).

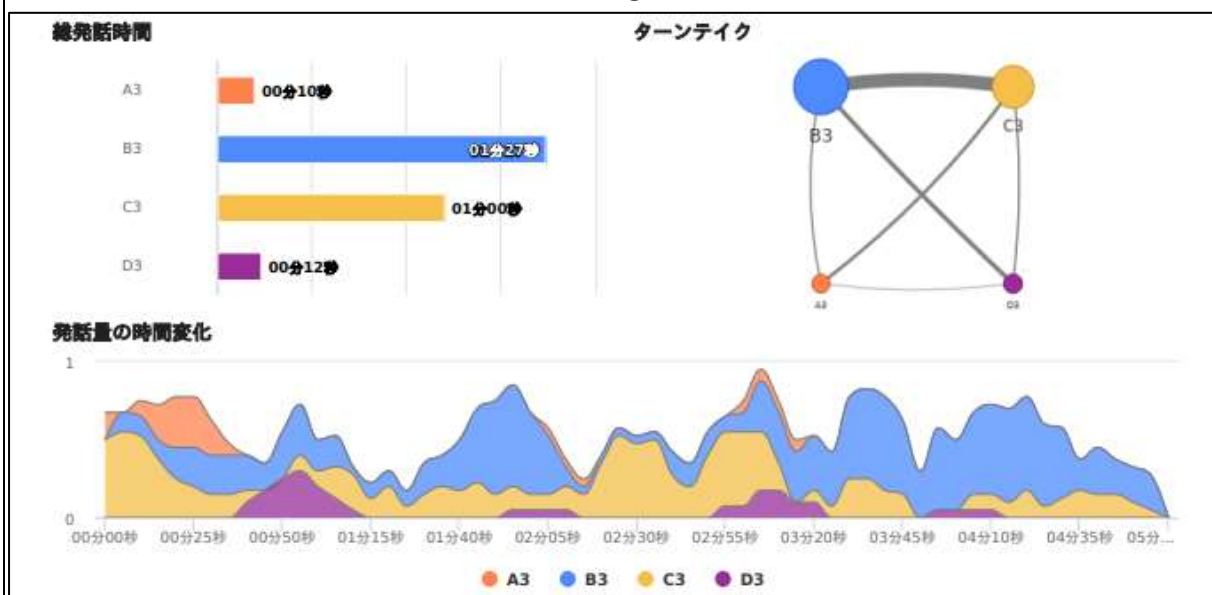


図3 抽出班の発話量データ

発話内容や発話量データから、B3とC3の2人の生徒が互いの考えを伝え合っていたが、A3とD3は5分間ほとんど話をしなかったことが分かる。ディスカッション後に各グループでデータを確認し、「話している量に結構差があるなと感じた」「自分の中では話していると思っていたが、データを見てみると他の人より話していなかったことに少し驚いた」「自分の意見を話すだけでは数十秒くらいしかないことに気付き、会話を継続するためには相手に質問することが大切であることが分かった」などと、振り返りシートに記述した。自分のパフォーマンスやデータ結果から振り返っていた。また、「次回のディスカッションに向けて心掛けたいことは何か」という問いに対して、「グループのメンバー全員が平等に話せるように、自分から積極的にその人に質問をし

ようと思う」「ターンテイクを見てみると、話しやすい人とたくさん話していて、会話のターンが少ない人がいたので、いろんな人と話を膨らませられるようにしたい」など、次のディスカッションへの意欲を高めた。

2回目のディスカッションを始める前に1回目の振り返り内容を確認し、“What club activity do you want to make for our school?”についてグループでやり取りを行った。各グループの観察から、自分の考えを伝えようと前のめりで話合いに参加したりグループのメンバーの名前を言いながら質問をしたりした。生徒のやり取りの発話内容（一部抜粋）と発話量（図4）は以下の通りである。

B3: What club activity do you want to make for our school, D3（名前）？

D3: Oh... I... I like game so I want game club.

A3: I like game too.

C3: I like（ゲームの名前）. Do you know?

A3: Yes. I play it every day.

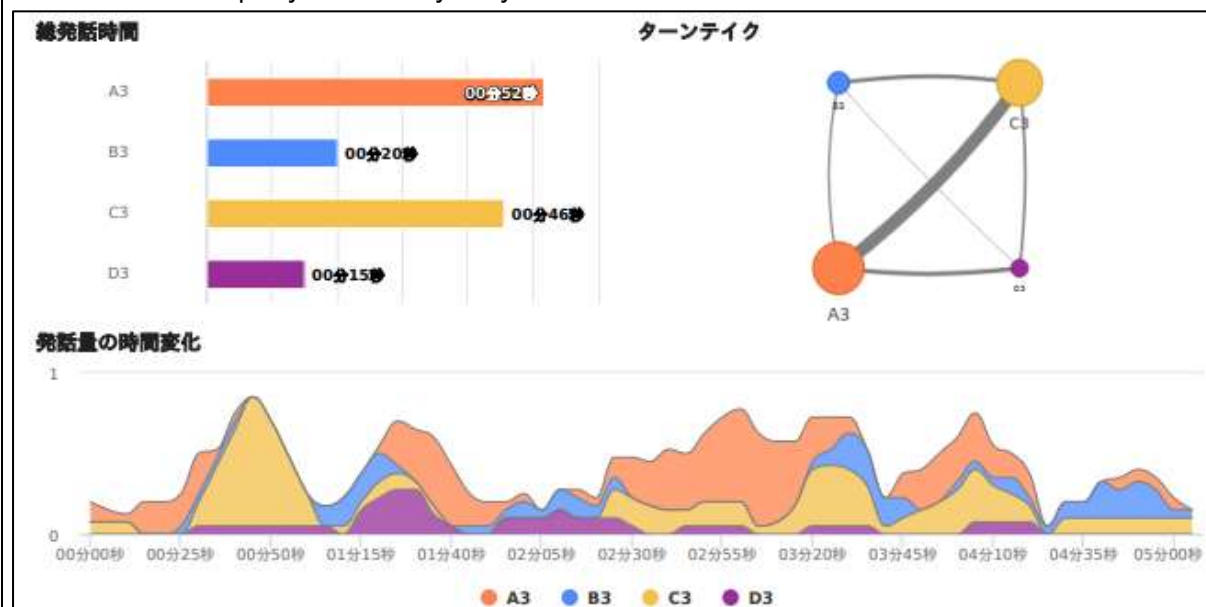


図4 抽出班の発話量データ

1回目の活動の流れと同様、ディスカッション後に発話の録音の視聴やデータ確認し、やり取りの状況を振り返った。生徒A3は「1回目よりも話す量が増えたがC3と共通の話題で意気投合してしまい、他のメンバーに質問できなかった。次回はメンバー全員で話ができるようにしたい」「他の人がやり取りしているときも黙って聞くのではなく相づちをするなどして、会話に参加することが大切だと思った。また、他の友達が会話しているときに、私の意見を言ってもいい？などのディスカッションで役に立つ表現を身に付けて次回は頑張りたい」など、2回目のディスカッションの反省と次回に向けて課題に対する目標を設定した。

3回目は、“Which do you like better, bento or school lunch?”についてディスカッションを行った。生徒のやり取りの発話内容（一部抜粋）と発話量（図5）は以下の通りである。

B3: What do you like better, bento or school lunch, D3（名前）？

D3: Oh... I think bento. Bento is delicious.

B3: I think so too. What do you think, C3（名前）？

C3: Well, bento is nice. But I like school lunch.

B3: Why?

C3: Because school lunch is... balance is good.

D3 : And it's ... it's 温かいって何て言うんだっけ  
 C3 : Warm.  
 D3 : Ah, warm!  
 B3 : I see. A3, what do you think?  
 A3 : I like school lunch. I can eat many kinds of food. It's fun.

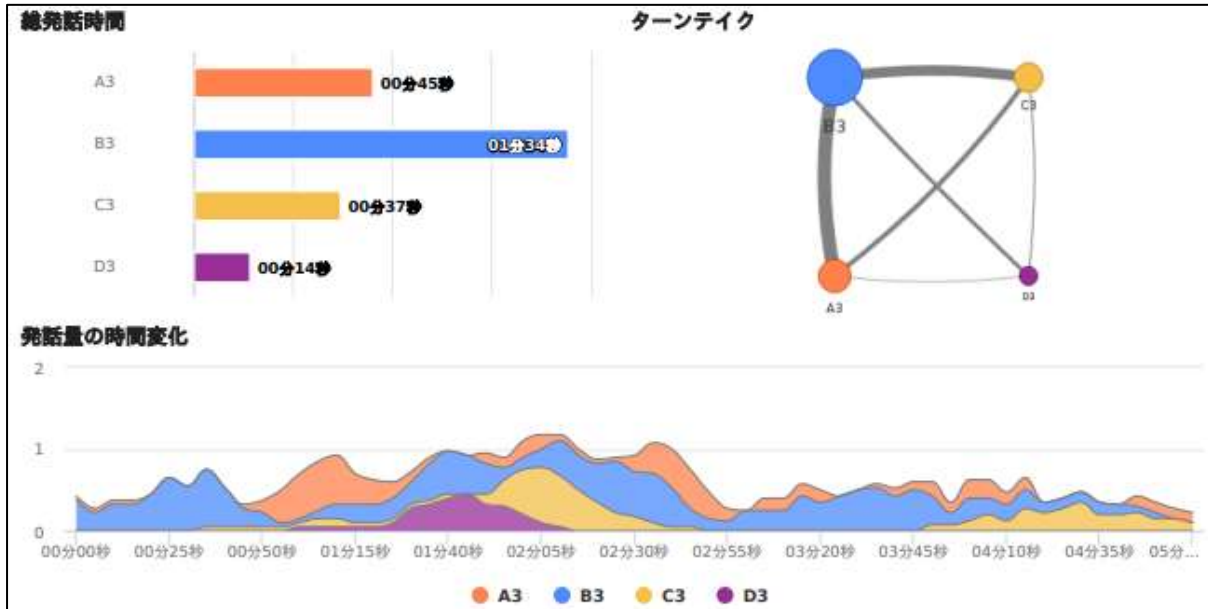


図5 抽出班の発話量データ

ディスカッション後の振り返りで、生徒は「1・2回目の反省を生かして、グループ全員に質問をすることができた。5分があつという間で、もっと時間があつたらたくさん話せたと思う。」「相づちを使って、沈黙をつくらないように意識した」「機械が聞き取ってくれなかったのか、データが示す数値よりももっと話すことができていたと思う」などと記述した。

最後に、全3回のディスカッションを通して学んだことやできるようになったことを振り返った。振り返りシートに、「最初は自分の考えを伝えて終わってしまい、沈黙の時間が多かった。しかし、ディスカッション後にデータを確認することでやり取りにおける課題を明確にし、ディスカッション活動の回数が増えるごとに、会話を盛り上げたりいろいろな人に質問をしたりするなどできるようになった」「英語を話すことは苦手だけど、仲間が自分の言ったことに対して相づちをしてくれたので、安心して話すことができた」「機械がなくても、これからの授業で、英語でやり取りする活動があつたら、自分の意見を伝えたり、相手に質問したりして会話を続ける工夫をし、活発なやり取りができるよう頑張りたい」などと記述した。

### 3. 結果と考察

Hylable Discussionのデータから、ディスカッションの回数を重ねるごとに、生徒の発話量がわずかではあるが増えていることが分かった。録音データから、ディスカッションにおいて自分の意見を述べるだけでなく、“What do you think?” と他の仲間に質問をして意見を求めたり、仲間の意見に対して “I think so too.” “I see.” “That’s a good idea.” など相づちをするなど、グループの全員の発話量を増やすための工夫をしていることも分かった。話合いのプロセスが可視化されることで生徒はやり取りにおける自らのパフォーマンスを客観的に振り返り、即興的に話す力を伸ばそうとする姿を見取ることができた。

また、英語を使ってやり取りする意欲の高まりもディスカッション後の生徒の振り返

りの記述から見取ることができた。例えば、生徒D3は1回目のディスカッション後にデータを確認し、自分がほとんど話していないことに気付いた。その日の振り返りシートには、「次回はディスカッションに参加できるよう、仲間の意見に対して相づちをしたり積極的に質問したりして発話量を増やしたい」のように、自分なりの目標を設定し、ディスカッション活動に積極的に参加しようとする姿が見られた。また、1回目の3回目の振り返りの記述を比較すると、多くの生徒が英語でやり取りをしようとする意欲の肯定的な変容を見取ることができた。

本実践では、主に1つの班を抽出して、発話量やディスカッションへの態度、振り返りの記述内容の変容を見取った。ICTの活用により、話合いのプロセスを可視化することで、生徒の英語スピーキング意欲を高め、英語発話量を増やすことができた。一方で、「ディスカッションの話題が難しく、自分の意見を英語で伝えることができなかった」「日本語では言えるが、英語で話すとなるとうまく自分の思いを伝えることができない」と振り返りシートに記述する生徒がいた。今後は、英語での即興的なやり取りにおいて生徒が自信をもって自分の思い通りに意見を伝えることができるよう、話す意欲を高めたり英語の発話量を増やしたりすることに加え、やり取りの質を高める技能の育成にも着目し、実践を積み重ねていきたい。

#### 参考文献

文部科学省(2017). 『中学校学習指導要領（平成29年告示）解説 外国語編』